

こうい保育者で

あつてはいけない



三宅 和夫

最近、幼児の教育について私を感じていることを何でもよいから書くようにとのことなので、一つ思い切つて率直に、幼稚園、保育所で保育にあたつておられる方々に対しての勝手な注文をあれこれと並べてみたいと思う。

もういまさらそんな注文を受ける必要はない、とつくに解決済みだと言われる人も多いかもしれない。もし、そうであれば、たいへんにうれいしことである。

いつぞや、ある所で園長さんから、いったい、先生、父母、施設設備の中で、どれに最も重点を置いて考えなくてはならないのだろうかというような質問をされたことをおぼえている。私はそれに対して、どれもそれぞれに重要なのであるが、特に何より先に考えなくてはならないのは、先生の問題ではないだろうかと答えた記憶している。

施設や設備を効果的に活用することができるかどうかは先生の能

力にかかっている。また、父母に対して有効な働きかけをするかどうかも先生次第である。それなのに世間では優秀な施設、設備をそなえた幼稚園をとかくよい教育をしてくれる所と考えやすいが、どんな先生が保育にあたつているのかの検討はあまりやらない。また経営者の中にも、父母のことや、施設、設備のことはよく考えても、先生のことには、あまり考えない人もあるのではなからうか。すこし極端ない方をしすぎたかもしれないが、幼児教育の発展は、先生たちにかかっていると思うので、いろいろと注文をつけてみたいのである。

以下、こういうタイプの先生では困るといふ例をいくつか挙げて考えてみよう。

(一) 生兵法で子どもを理解できたと思う先生

これは、ある意味では意欲的な先生で、ただなんとなく子どもたちに接しているだけでは飽き足らず、子どもたちについてなにかを知らうとはしているのである。よく私も、そういう先生のやった研究報告というものにふれることがあるが、一見、体裁よくとのつ

て見えるが、あまり価値あるものとは思われないものが多い。いなくむしろ危険性があるといった方がよいものすらある。例えば、親子の関係の形式をある種の既成の質問紙検査で調べ、それと子どもたちの持つ問題行動を関係つけてすぐ因果関係として説明したり、知能検査や性格検査をやって、簡単にこの子はこういう子だと決めこんでしまったりといった類いである。もちろん心理学的な診断検査の方法は、非常に進歩してきているのではあるが、たとえ専門家であっても多くの場合、そう簡単には的確な判定を下しうるものではないし、まだまだ診断の方法については、研究が重ねられなければならぬのが現状である。まして先生たちが、テスト等を手軽に使用することは、つつしまなくてはならない。われわれおとなは子どもの前には謙虚でなくてはならない。子どもを理解しようということは決して容易なことではないのである。生きた子どもを教育者として理解するのは、あくまで現実の生活場面、つまり教育の過程の発展の中において可能なのであって、それを抜きにしてテストなどを安直に使ったものは断じて血の通った研究ではないということを確認しなくてはならない。日々の教育実践の中で自分たちの立てるフラン、働きかけとの関連において、子どもの行動を的確に観察し捉えていくことこそ必要なのであって、そのための方法の検討などが、もっと行なわれるべきであろう。現実には活動している生きた存在としての一人ひとりの子どもの姿を浮き彫りにするような研究——それは当然実践と結びついているものであるが——こそが大切

なのであることを、よく考えてほしいものである。

(二) ひとりよがりて研究心に欠ける先生

ある意味で前のタイプの先生と対立した型であるが、正しく子どもを理解していない点では同様である。この人たちは、子どもを研究材料として扱うということには反対であるが、その限りにおいては間違っていない。しかし子どもを理解しようと努めないという態度を持っているということは重大な欠陥である。ある程度、経験を持っていて先生の間には案外こういう人が多い。自分の身についた技術と経験に自信があり、たいして努力しなくてもけっこう子どもを扱っていけるのである。こういう人は研究と実践は別のものと考えており、研究的なことにはあまり高い価値を置いていない。子どもたちを退屈させず、楽しくすごさせていけばそれで事足りりとしているふうがある。私にはそういう自信がふしぎでならない。どうして自分のやっていることが、そんなに間違いないことだと確信が持てるのだろうか。教育とは、その場その場だけが、大過なくやればよいというものではなく、いつも発達し動いてゆくものとしての子どもを考えなくてはならないはずである。こういう人に限って、あまり他の人のやり方に学ぼうとしたりすることを好まない。時には、人のやり方をよく見て、比較して考えてみる必要がないだろうか。そして自分の保育した子どもになにか共通に見られるよい点、わるい点がないかどうかと考えてみるべきである。たえず自分を批判的に眺め、疑問を抱いてそれを解決しようとするとなかなか独善的な

態度は教育者として最も好ましくないものではないだろうか。

(三) 科学性に欠ける先生

最近の科学技術の進歩は目ざましい。私たちおとなが子どもであったころとはすべてがすっかり変わってきている。子どもたちの遊びや会話の中にもそうしたことの反映が、しばしば見られる。一方、幼児の科学性ということも、何回か、全国的な研究会などで取り上げられてきている。ところで先生たちの中には、この方面に弱い人たちがかなりいるのではないだろうか。一般に女性は、科学に弱いといわれているが、たしかにそれを認めないわけにはいかないような事実もよくみられる。もちろん幼児にむずかしい科学的知識を教えることは不必要であろう。しかし子どもたちは、しばしば科学的な事象に興味を示し、子どもなりに疑問を抱く。そういう態度は大切に育ててやらなくてはならない。そしてそのためには子どもたちに接するおとなたちがやはり科学的関心や興味を持つ人でなくてはならない。自然の観察をさせる場合でも、先生自身がそのことに興味を抱いているといえないでは、子どもたちに与える影響はたいへんにちがってくるであろう。

このことと関連して私がよく気になることは、先生たちが機械の使用をおっくうがるということである。今日たいていの幼稚園保育所には、幻燈機やテープレコーダーが備えつけられているし、さらに映写機や撮影機などを持っている所も少なくないようである。ところが、こうした道具を自在に使いこなせる先生というところが多く

はないのではなからうか。気軽に、こういう道具を用いて子どもを指導したり、また観察させる必要のある事物を撮影したり録音したりする技術は、これからの先生としてはぜひとも身につけなくてはなるまい。先生がひとりでもかをも子どもに与えようと力んでも限りがあるのであり、こうした道具を有効に駆使することによって、はるかにゆたかな経験を子どもたちに与えることができるのではないだろうか。

(四) 自主性に欠ける先生

先生たちだけでなく、私たち日本人の共通の特長として挙げられるのは、権威というものに弱く、無批判で自主性のないことである。アメリカでこれこれのやり方がなされているといえば、すぐそれをまねてみるなどということが戦後よく見られたが、考えてみれば、われわれをとりまく環境は、まるでアメリカとはちがうのだから、しっくりするわけがない。同じようにひと口に子どもといっても、東京の子どもと北海道の子ども、さらに札幌の子どもと根釧原野の子どもでは、育っている環境も彼らの発達の姿もたいへんにちがっている。だから東京の優秀な施設、設備を誇る幼稚園での保育のやり方が、別のところにそのままではまるものではない。にもかかわらず、とかく表面だけを模倣するということがありがちである。もちろん立派な保育がなされている幼稚園・保育所を見学したり、模範的カリキュラムを検討してみることは大切なことであるが、それよりも重要なのは、自分が保育しようとする子どもたちの生活環

境や発達の特質をよくしらべることである。また自分の活用できる施設や設備の状況を検討してみることも必要である。近くに広々とした野外保育に適する場所があるにもかかわらず、そのような場所にめぐまれず、室内保育に重点を置いているところのまねをして、狭い室内で多くの時間をすごさせるならたいへんあやまちを犯していることになる。もう一度、自分のまわりをよく見て考えてみる必要がある。遊具や玩具が足りないような場合、なんとかして不十分な財政から新しいものを購入する費用を捻出しようとする。せっかくのお金で買うのに、ただ他所の幼稚園や保育所のまねをして、無計画に購入したり、カタログの中から適当に選んだりというようなことはないだろうか。なにを買うかの決定をする前に、自分たちのところの子どもの遊びの状況をよく検討してみることがなされなくてはなるまい。

(五) 社会性に欠ける先生

子どもの社会的な適応をうながしてやり、子どもの社会性を云々することは、保育の中でも特に大切なねらいであるが、先生たち自身この点においてどうだろうかを反省しなくてはならない。世の中にあるさまざまな矛盾や悪は、何らかの形で、子どもたちの行動に反映している。子どもたちの中にある問題を解決するためには、井の中の蛙であってはいけないので、もっと目を大きく開けて社会の中にある問題についても考えてみなくてはならない。そんなことは自分たちには無縁なことで、日々にかわいい子どもたちと楽しく過

してゆけばよいのだというような態度では決して子どもたちの持つ問題を解決してやることはできないだろう。このごろは先生たちが集って話し合ったり、発表し合ったりすることが多くなってきた。

以前にくらべれば、相当な進歩だと思う。しかしまだ、それは一部の人だけで、多くの人は、会には出て、何を考えているのか、どんな悩みを抱えているのかさっぱりわからないようなおしどまった状態に止まっている。どんなつまらないと思うことでも、勇気を出してしゃべってみることが必要ではないだろうか。またおたがいに率直に自分のやり方を発表し合ったり、見学しあったりして、批判し検討し合ってゆくことがもっと行なわれてよい。研究発表とか公開保育というものは、往々にして訪問着でかしまって応接間にいるようでよそゆきのことが多い。もっとふだん着のまま、茶の間で語り合うような機会を持ち合えたら実のあるものになるのではないか。どんなに少数数でも、こうして手をつなぎ合ってやってゆけるならば、ひとりではどうてもい考え及ばなかったような知恵も出、また困難にもくじけない勇気がわいてくるのではないだろうか。

以上、思いつくままに、いくつか先生方に対する希望を述べてみた。もうそんなことはないと言われる方々が多ければ幸いである。先生方がますます努力され、ほんとうに子どもたちにとって良い保育がなされ、いっそうの成果の上がることを期待しながら筆をおくことにしよう。

*

*

(北海道大学)